候補生たち

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
候補生たち

【Ｎコード】
Ｎ９３０５Ｙ

【作者名】
杉林機構

【あらすじ】
魔界、魔力、そして魔法。隠されていた秘密を暴き、地上を魔界にしようとする襲撃の夏から半年。聖木乃女子学院にはそれぞれの思惑を抱えた守護者候補生たちが集まっていた。府本里美、昴星河の二名もまた。果たしてライバルを蹴散らし、守護者の椅子を勝ち取るのはだれなのか。

#1　わたしが、良い子じゃないって。

神社自体にはなんの興味もなくて。
だから名前も知らないし、なんの神様かも知らないし、ちゃんとお参りしたこともない。
けれど、たぶん気にはなっていて。
うまく説明できないけど、古い大きな木がたくさんあって、いつもうす暗くて、いつも人の気配がなくて、いつもひんやりしていて、なんかとくべつな場所って感じがしてた。友だちとケンカしたとき、親に叱られたくないとき、色々悩んだり落ち込んだりしたとき――つまり、ひとりになりたいとき、つい行ってしまう場所だった。
お賽銭箱の裏側に座って、向こう側にはきっと神様がいるはずの扉にかかった重たそうな錠前をぼんやり見つめていると、ふしぎと力が湧いてくるような、そんな気がして。
わたしの場所っていうか、パワースポット？　みたいな。
でも、あの日はちょっと違っていて。
友だちとプールに行く約束があって家を出たのに、気づいたら神社にいた。セミの鳴き声に囲まれて、じっとりと汗をかいて、下に着ていた水着が変に張り付いていて、暑いのになんだか寒いような、いつもとちがって気持ち悪い感じ。
「あー、あー、あーぁー……」
わたしはバカみたいに口をあけて、声を出していた。
そうしていないと息苦しかったから。
遅れるからメールしようとか、はやく泳いでさっぱりしようとか、そろそろ宿題を片付けようとか、帰りにアイス食べようとか、色んなこととか、からまりながら頭の中をぐるぐる洗濯機みたいに回っていて、けど、なにひとつ考えてもなくて、どこかおかしかった。
そして足は勝手に動いていた。
「……あー、あーぁー、あー、あー、あーぁー」

神様の集金箱をいつものように無視して、その奥の扉にかけられた錠前に触れる。なんとなく、けれど、たしかに開く予感があった。実際、鍵もなにもなくカチリと動いて、血みたいな鉄の匂いが鼻を刺す。中に入ろうなんて思ったこと、一度だってなかったのに。わたしはガチャガチャ外した錠を投げ捨て、力いっぱい扉を開いていた。

冷たくて、かび臭い空気があふれ出て。

「こんにちは」

不意に、背後から声をかけられて。

「ぁっ」

わたしは吐き出しかけていた声と一緒に息を飲み込んだ。

悪いこと、してる。そう思ったら背中からどっと汗が出てきて、それがすぐに冷えて、身体がひやっと震えて、動けなかった。一度、本屋さんで万引きした中学生が呼び止められるのを見たことあって、逃げられそうなのに、逃げられなくなっちゃう。こんな感じなんだ。

捕まるんだ。

「聞こえなかった？　こんにちは」

「……」

どっくとっく。

息苦しくなるような、脈打つ血管の音を耳の奥に感じながら、両親のこと、考えてた。一人娘が捕まったら、どう思うだろうって。けど、あんまり深刻な気持ちにならなかった。逆に、あの仲良しで、優しい二人が、どんな風になってしまうかって、ワクワクする。『あんたなんかウチの子じゃない！』とか言われちゃうとかって。こんな日がいつかくるって思ってたのかもしれない。なんか変だけど、わかってた。

わたしが、良い子じゃないって。

どっくとっく。

「どうしたの？　ねぇ？」

足音がどんどん近付いてくる。

唾を飲み込んで、わたし、笑いそうになってた。誕生日プレゼントを貰って、嬉しいけど、なんか笑うと感じ悪いかな、とか思っちゃうような、外からどう見えているのか気になっちゃって、くちびるがピクピクするときの、あの気分。わたしの中に、隠したい自分がいることをすごく意識する。良い子のフリをしたがってるって。

ほんとうは、良い子じゃないから。

「あなた、府本（ふもと）さんちの里美（さとみ）ちゃんでしょう？」

「……」

振り向かないで、うなずく。

どくとくどくとくどくとくどくとく……。

名前を呼ばれて、わたしの鼓動はリズミカルになる。

悪いことしようと思ったことないけど、良いことしようと思ったこともない。

なんて、この言い方はきっとフェアじゃなくて。

悪いことは思いつくけど、良いことは思いついたこと、ない。

「里美ちゃん？」

ポン、と肩を叩かれて。

そこまで。

わたしがあの日について覚えていることは。

目が覚めたら翌日で。

家の、わたしの部屋の、布団の上で。

変な夢、と当たり前のように納得したのだけど、パジャマのまま居間の襖を開けると、普段はかかっていないエアコンが動いていて、冷たい空気が流れ出てくる。両親と担任の吉田先生と見知らぬ女の人、男女二人ずつ、八つの真剣な目が一斉にわたしを見た。それですぐ夢じゃないとわかった。夏休みの午前六時、ラジオ体操がはじまる時間だった。そんな時間に大人が集まっていることなんて、ふつうに変な夢みたいだったけど。

「里美、着替えて顔を洗ってきなさい」

お父さんが、これまであまり聞いたことのない落ち着いたトーンで言った。
横でお母さんがうなずいて、わたしもうなずいて。
「ぷはっ」
生ぬるい水で顔を洗ったら、それほど悪いことしたっけ？　と冷静になる。たしかに、神社の社殿に勝手に入るのは悪いことだろうけど、学校の先生を呼ぶほどのこと？　鍵だって最初から壊れていたのでは？　中にも入ってないし？　居間にいた女の人が神社の人？
次から次へと疑問が湧いてきて、まとまらなくて。
「どうでもいいや」
すぐに考えるのをやめた。
あの一瞬にワクワクしたような感情はもうどこにもなくて、これから面白くもなんともなさそうな現実的お説教が待ってるだけと思ったら、なにもかもバカバカしい。わたし、どうかしてた。夏休みのなにかで浮かれて。くっだらない。
部屋に戻ってケータイを見ると、約束をすっぽかしたらしいことだけ現実。
心配するメールから、だんだん怒っているらしいメールへ。
フォロー、大変だ。けど、ともかく先生を待たせていた。言い訳は後で考えよう。さくっとマジメに叱られればお説教もそんなに長時間にはならないはずだ。こんなに朝早くから来ているのだし、先生も女の人も、そもそも両親だって今日の予定がある。
「お待たせしました」
できるだけよそ行きの声で、わたしはわざとらしく反省しながら居間に戻る。
廊下で正座をして襖を開ける。テレビで見た旅館の仲居さんがそうするようにおしとやかにそして深々と頭を下げて、バカみたいだけど、子供なりに真剣にやってるんだなと先生たちが思ってくれれば、笑われてもオッケー。そんな、きったない計算で。
「その、昨日は、申し訳ありませんでした――」

そう言ってゆっくりと頭を上げると、
「――あ、れ？」
四人の大人たちは不思議そうな顔でわたしを見ていた。
「なにを謝っているんだ？　里美」
「……えー、っと、昨日のこと、じゃないの？」
「それなら、謝るんじゃなくて、お礼だろう。昨日、神社で倒れていた里美を家に連れてきてくださったんだ。吉田先生と、こちらの方が」
と言いながら、お父さんは繰り返すように頭を下げる。
「僕は気付かなくて、通りすがりに見つけたのは平島さんですから」
担任の先生は慌てて謙遜し、
「そんな、私も偶然ですよ、昔から寺社仏閣に興味があるだけで、ついふらっと覗いただけで、そんなお礼を言われるようなことではありません。里美さんが無事でなによりです」
ひらしまさんと呼ばれた女の人が上品に笑う。
両親や先生よりは若いだろうか、でも、なんだか高そうなスーツを着ている。シャツの生地もやたらなめらかだ。顔とか身体つきはそれほど印象に残る感じじゃないけど、身なりがきちんとしているので賢そうに見える。けれど、なにより、その声は神社でわたしに声をかけたものと同一であるように感じられた。それは間違いなくて。
どっくとっく。
また鼓動が大きくなった。
「いーえー、軽い熱中症ですから、里美、ほらきちんとお礼をしなさい」
いつのまにかわたしの横に移動してきていたお母さんが、そう言ってわたしに頭を下げさせる。「ありがとうございました」と言わされながら、わたしはしっくりこない。どうして、神社のこと、言わないのか。勝手に鍵を外したことを。
大人がなにかを隠すときは、必ずそうする理由があるから。

「夏、外を出歩く時は帽子ぐらいかぶらないとね？」
「……はい」
わたしは疑ってかかる。
「では、里美さんも来たので、説明をもう一度」
ひらしまさんは食卓の上に広げられていた紙をとんとんと揃えた。
「ほら、里美、座りなさい」
「うん」
お母さんに促されて座布団の上に正座して。
「これ、見てくれる？」
「はい」
ひらしまさんはわたしの前に一冊のパンフレットを置いた。表紙には大きな桜の木と、学校の校舎らしき写真。そしてなんだかオシャレな制服を着た女の子が、ありがちな嘘くさい笑みを浮かべている。この学校に入れて幸せ、みたいな感じ。
「せいき、の、じょしがくいん……」
わたしは印刷されている文字を口にする。
「いいえ、里美さん。聖木乃（ひじり・きの）女子学院中等部」
「はあ、そうですか……」
そう言われれば、東京に行く途中に木乃という街がある、ことは知っていて。
「来年から、この学校に通いませんか？」
「え？」
だから？　と聞くよりはやく、見透かされるように言われた。
「わたしが？」
そう呟いて、わたしは両親や先生の顔を見る。お父さんはなにやら難しい顔をしていて、それはお母さんも近いようで、でも先生は強くうなずいていて。
「そう、府本里美さん、あなたに、是非とも」
そして、ひらしまさんはなんだか凄みのある笑顔でわたしを見ていて。

なにかに巻き込まれてる。
整理できないわたしの頭にも、それは強く感じられた。

#1　わたしが、良い子じゃないって。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

#2　わたしとしても、やめるつもりだったけど？

ひらしまさんは、平島志穂（しほ）、という名前で。
体操部コーチで、大学時代には跳馬でインカレ三位にもなったことがあるそうで。
言われて見れば、正座する脚の筋肉は見知った感じで。
「スカウト？」
話は飲み込める。つまり、物心つく前から、選手だった両親に連れられるまま体操競技の道を進んで、地区の大会ではそこそこの成績を残している。そんなわたしを学費免除の特待生として迎えたい、そういうことだった。
「ええ。どうかしら？」
平島さんは競技をやっていた人らしいきちんとした笑顔で言った。
「いい話、ですね」
良すぎる、わたしはそう思う。
生まれてから十二年、そのほとんどを捧げてなお、わたしの体操は技能的にもセンス的にも突出したところはなくて。地道な練習で地味に整った、良く言えばそつのない、悪く言えば面白味のない、将来性に乏しい、大成しない、そんなものだから。ふつうにスカウトなどありえなくて。そのことはわたし自身もよくわかっているから、別にいいのだけど。
話を聞くわたしを見ている両親の表情がさえない。
全日本にも出たことがあって、わたしに才能がないことは他のだれより、きっとわたし自身よりわかっていて、それでもいつか化けるんじゃないかと期待しちゃってるお父さんも、オリンピック候補とまで言われた時代もあって怪我で挫折した夢を託してくれちゃってるお母さんも、あからさまに浮かない顔をして、だまってる。
そろそろ、あきらめどき、だから？
そうかも。両親とも小さいから、わたしの身長もそこまで伸びな

いだろうけど、成長期の身体に負担をかけて体操をつづけるのは大変なことだから。選手としての展望があるならともかく、スポーツとして楽しんでつづけるならともかく、無理してまでって。

「……なんか」

そんな想像したらムカついてきてた。

わたしとしても、やめるつもりだったけど？

でもさ。ひとり娘に期待する両親の気持ちをおもんぱかって？

ぱかって脚を広げたり、ぱかって回ったり、ぱかって跳んだり、ぱかって平均台の上で逆立ちしたり、ぱかってレオタード着たり、ぱかってぱかってぱかぱかしいと思う心を押し殺してやってきたよ、わたし。

なのに。

才能ないからよそう、なんて。

そんな言われかた、されたくない。まだ言われてないけど、言われたくない。

遠回しにだって。

「いい話だから。わたし、この学校行ってもいい？」

だから、わたし、満面の笑みで言ってやった。

けど。

「……そうか、ならわかった」

お父さんの反応は想像していたのとは、ぜんぜん違っていて。

「里美、これを見なさい」

そう言って、テレビのスイッチを入れた。

朝の情報番組は、ふだんのゆるい空気ではなくて、コンクリートの瓦礫の山を映していた。今年はそんな映像もずいぶん見てる。でも、それは見覚えのある建物のような気がして、そして、ふと見た食卓の上の写真、聖木乃女子学院のパンフレットの表紙とダブっていて。ていうか、同じ場所にしか見えなくて。画面の右上隅には、爆破テロ、女子校、の文字。

なにこれ。

「なにこれ？」
思ったままが口に出て。
「……」
お母さんはなにも言わずハンカチで目元を拭った。泣いてる？
「昨日の事件だ。里美は倒れていたから知らなかっただろうが、聖木乃女子学院と、木乃の駅に何者かがテロを仕掛けたらしい。学校はこの有様で、駅に至っては跡形もない」
お父さんはテレビを消し、わたしの目をまっすぐ見た。
「これを見ても、まだ行きたいか？」
「えっ……え？」
どういう意味？
学校にテロ？　駅が跡形もない？　わたしが行くのはテロのあった街の、テロの標的になった学校ってこと？　それって学校存続できるの？　いや、そんなこと問題じゃなくて、お父さん？　ひとり娘をそんな学校に行かせる気なの？　正気？
バカ？　ぱかじゃなくて、バカなの？
ありえない。いくらお父さんが体操バカでもそんなことは。
「もちろん――」
行かない。行くわけがない。そんな危ないとこ。
「そうか、わかった」
お父さんは、わたしの言葉を最後まで聞かなかった。
うちではよくあることで。同じ競技をやってたからなのか、スポーツ選手特有のものなのかはわからないけど、お父さんとお母さんは以心伝心で。その娘であるわたしも勝手に以心伝心の中に組み込まれてて、よく、言ってもいないことを合点承知されてる。
困るのだけど。
「お父さんは、ずっと言おうか言うまいか迷っていた」
わたしが口をぱくぱくさせている内に、どんどん話が進む。
「里美、おまえには体操の才能がない」
「……んな」

わかってる、けど、このタイミングで言わなくても。
「技術もセンスも、並のレベルを上回るものはないだろう。やめたいというのならば、お父さんも無理強いするつもりはなかった。しかし、やるというのならば、より自分を高みに運ぶことのできる環境へ向かうべきだ。お父さんやお母さんから離れても」
と、思うと言葉もでなくて。
「才能、技術、センス、言うまでもなくどれも必要なものだ。だが、それだけで勝てるものでもない。最後にものを言うのは危険へ飛び込む勇気だ！　プレッシャーの中で自分を見失わない度胸だ！　不可能へ挑むチャレンジング・スピリッツだ！」
最後にものを言うものが三つもあります、お父さん。
「体操は常に死と隣り合わせの競技だ。だからこそ、いつでも死を意識して、その恐怖に立ち向かわなければならない。体操をつづけるという意志があるとわかったからには、己を厳しい環境におくことも大切だ。それが里美、才能を超える武器となるはずだ」
そう言い切って、自分の言葉に納得するようにうなずいて。
「娘をよろしくおねがいします」
お母さんが平島さんに頭を下げた。
「ええ、必ず里美さんを立派な選手に育て上げてみせます」
「……」
どういうこと？
それは、たしかに言ったけど？　わたし、この学校に行きたいって。うん、言った。でも、ふつう、テロの現場に娘を送り出さないって、まともな親なら。まともな……そっか、あんまり意識してなかったけど、まともな親じゃなかったんだ。じゃ、仕方ない。
今、わかったよ。
「あの、よろしくおねがいします」
わたしも、両親に合わせて頭を下げる。
テロで死んでも、体操で死んでも、どっちでも死ぬのは同じ。

なんて、簡単に割り切れるわけもなくて。
また、神社に来ていた。
朝ごはんを一緒に食べながら、テロのこと「二度目ということがないように最高の警備体制を敷くので、日本で一番安全な学校になります」とか、平島さん言ってた、けど。もちろん、それで不安が安心に変わるなんてこと、あるわけなくて。でも、本質はそこじゃなくて。
いいのかな。
わたしの人生、こんな風に流されてて。
よくないな。
賽銭箱によりかかって、神様の扉を蹴っ飛ばして、いつもと変わらずかかってる錠前をがたがた言わせて、汗でしんなりした前髪がそよ風でひんやりして、おなかが空きはじめて、もうお昼ぐらいになってて、わたし、どうしようもない感じ。
お父さんのことも、お母さんのことも、嫌いってわけじゃなくて。体操もなんだかんだ言って、積み重ねてきて、捨てるのがもったいなくて。
だから、新しい環境に行ってみたい気持ちもあるけど。
わたしがほんとうはどうしたいのか、わからない。自分でも。
「もっと、なんか、ないかな……」
「あるよ、里美さん」
呟きに被せるように、後ろから言われて、見上げて。
「あなたには資質がある」
平島さんが賽銭箱の上に乗っかって、わたしを見下ろしていた。
どういう理由かわからないけど、巫女さんの服を着て。
「そこ、乗っていいんですか？」
「ああ、これ？　別にいいんだよ、ここに神様いないから。お賽銭を投げる人もいないし」
いない？　お賽銭を投げる人も？
「ていうか帰ったんじゃ」

「帰ってるよ、ここが私の帰る場所だもの」
「体操部のコーチが？」
「あれはウソ。ごめんね。学生時代に体操をやってたのは本当だけど、今は、ここを守るのが仕事だから。そして資質のある人を見つけたら、学校に入ってもらうのも。今回は状況が状況なのでやや強引で性急なアプローチを仕掛けたってわけ」
「うそ？　ここを守る？　資質？　状況？」
よくわからない。
「昨日のことで一番の難関はご家族の了承だったからね？　もっと時間がかかることも覚悟してたけど、話が早めに片付いて助かったわ。これからが本番だもの」
平島さんは、ぴょんとジャンプして、扉の前に立つと、鍵も使わず錠を外した。
昨日の夢みたいに。
「それ……」
「里美さんが倒れたのは熱中症じゃない」
平島さんはゆっくりと扉を開いて。
「急に魔力を浴びすぎたから、身体がついていけなかった」
「……ま、りょく？」
わたしが呟いて、平島さんがうなずいて。
「魔力、魔界から溢れるエネルギー。それを操る魔法でこの世界を守る守護者。あなたにはそうなれる資質がある。だからこの場所に入れたし、鍵を開けることもできた」
「しゅごしゃ？」
神社を取り囲む木々が、ざざ、と揺れて。
「ようこそ、里美さん。競技でも偽装されたテロでもない、本当の世界へ」
わたしに手を差し出しながら、平島さんはどこか哀しそうに笑って。
「ほんとうの、世界……」

たぶん、逃げようと思えばそうできたけど。
そうしなかった。
「……ほんとうに？」
くすっと笑って、私はその手を取って、誘われた。
昨日感じた、ワクワクした気持ち、まだここにあったから。

#2　わたしとしても、やめるつもりだったけど？（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

♭1　昴　星河

地球を含む広大な宇宙がひとつの世界であるように、『魔界』もまた数多の世界のひとつでしかなかった。それぞれの世界は、それぞれ無関係に存在し、それぞれの時を歩んでいる。世界と世界の狭間は『境界域』と呼ばれるなにもない領域によって時間と空間を隔てられ、本来は交わることもない。

その本来的には交わるはずのない世界の境界を乗り越えてしまう力こそが、魔界の魔界たる由縁とも言える『魔力』であった。そのエネルギーは欲望する。空間的、時間的制約を無視して魂を求め《転位》し、魂の意志を侵蝕し《変異》する。植物を著しく成長させ、動物を魔獣へとその姿を変え、そして世界を魔界に創りかえる。それは人間も例外ではない。だからこそ秩序に対する大きな危険であった。

そんな魔界、魔力からこの世界を守る存在が『守護者』である。地上に魔力を放出する『魔界の穴』から人を遠ざけ、魔力による影響を最小限に抑えることが彼らの目的である。歴史的、社会的経緯により様々なルーツを持つ彼らだが『魔界の生活技法』通称『魔法』を用いるという点に関しては共通している。魔力を知ればこそ、魔力を用いることでしか対抗できないことは明らかだった。結果、彼らは『魔法』を世に隠しながら、『魔法』を使って世を守る、という二律背反を背負っている。そしてそれは除去困難な『魔界の穴』という原因と共に、解消されることなく一族の秘密として受け継がれることになった。

昴星河（すばるせいが）もそんな守護者の家に生まれたひとりである。

兄一人、姉二人、妹二人、三女の星河が『資質』に目覚めたのは十一歳の冬。

その年はじめて積もった雪で遊んでいる内に、気がつけば昴家の管理する魔界の穴がある古墳へ導かれていた。古墳と言っても本物の墓所ではなく、その時代より受け継がれたカモフラージュである。鬱蒼と生い茂る木々に隠され、魔力を体内に十分吸収していなければ認識することすらできない場所へ誘引されること。それこそが資質の第一条件である。

星河の握りしめた雪玉が氷の塊になっていた。

「なんやの……ここ」

彼女の目の前にはどこか巨人が思いつくままに積み上げたかのような無造作さで、しかし決して崩れないバランスの岩石がモニュメントを作り出していた。アンバランスな構造物は、まるで崩してほしいと言っているようにも見える。

「えらいもんや」

そう呟きながら、星河は内側から湧き出る衝動のまま、雪玉だったものを巨石群に向かって投げつける。フォームもなにもない力任せの投擲だったが、氷塊は積もったばかりの雪を吹き飛ばして、巨石の一つに突き刺さった。およそ人間の膂力ではない。

「すっごいわぁ」

投げた星河本人にとってもそれは信じられない光景だった。近付いてみると、突き刺さった岩石に亀裂まで走っている。壊せる。そう思った途端、無闇に楽しくなり、彼女は回りにある雪をどんどん固めて、次々に投げつけた。

巨石に氷塊が突き刺さるたび、キンと甲高い音が森に響く。

「――そのくらいにしとき、星河」

「え？」

ひとつの岩石が砕け、古墳が全体のバランスを崩して倒壊するまで暴れた後、彼女は背後から呼びとめられた。ハッと、自分がしでかしたことの大きさに血の気が引く。

「……お、お母ちゃん？　これはな、違うんよ、うち、な……」

声の主はすぐにわかって振り返るが、そこにいたのは奇妙な格好

をした母だった。
「ぷっ、ははっ、なんやの、その……ふぐっ」
叱られるという思いより笑いが勝った。子供六人を生んですっかりおばさん丸出しの体型となった母がバレエかフィギュアスケートの選手が着ているような、ラインを見せるピッタリとした衣装を身にまとい、切り株に座って脚を組んでいる。
「それ……くふっ、あかん、笑える、ぶ、ぶふっ。豚のプリマドンナ？」
星河は思ったままを口にした。
「だれがプリマハムや！」
母はそう叫びながら、中指を親指に引っ掛けて弾いた。
「へ？　……っぎゃはん」
十数メートルは離れていたが、星河はバットでぶん殴られるかのようなゴツンという衝撃と共に、仰向けにひっくり返る。パワーは段違いだが、それは確かにお馴染みとなっている母のデコピンだった。当たった場所に触れると血まで出ている。
星河は青ざめ、飛び起きて抗議した。
「ちょ……お母ちゃん、嫁入り前の可愛い娘の顔になんてことしてんの！」
「そこ？　あんた、ちょっと鈍いんちゃう？」
母は呆れた顔で耳の穴に小指を突っ込んでほじった。
「にぶい？　あんなぁ？　こんなん傷跡残ったら、うち……って、あれ？　治って？」
星河は言いながら手鏡で自分の顔を見ていたが、血を拭うともうそこには傷口もなかった。赤くなった形跡すら残っておらず、何事もなかったかのようである。
「まあ、ええわ。ちょっと見とき」
母はそう言って、スタスタと崩れた古墳に向かって歩いていく。
「……？」
「よっこいせ！」

掛け声とともに、母は崩れた古墳の巨石を持ち上げた。
ひとつひとつが大型の重機でもなければ動かないような代物だけに、それだけでも信じられない怪力だったが、星河が砕いた方の岩石の欠片が勝手に動き出し、元々置かれていた位置へ戻り、みるみるうちに元通りの形へ修復されていく。
「は、へぇ」
星河はぽかんと口を開けてそれを見守るだけだった。
「どうや？」
「お母ちゃん、ハムやのうて、スーパーマンやったんや……」
古墳と母を交互に見て、呟く。
「そこはせめてスーパーガールとか、プリキュアとかゆうたらどうや？」
「……そやな、キュアフラワーや」
妹と一緒に見ているアニメについて星河は重々しく言った。
「それババアやろ。知ってるわ」
デコピン。
「ぎゃはん！」
今度はひっくり返らず、踏ん張った。
「キュアムーンライトぐらいお世辞でも言えへんの！」
「高校生やで、お母ちゃんそれは犯罪や」
「セーラーマーキュリーバカにしとんか！」
「しらんわ！」
母娘の口喧嘩はなかなか収拾しなかった。
一通り落ち着いて母が説明を終える頃には日も暮れていた。
「――まあ、つまりや、あんたは魔力を身体に吸収して使える、守護者になりうる資質があると。それが今日、ハッキリしたっちゅう話やな。あんたの雪玉で石を砕けたり、お母ちゃんのデコピンが飛んだり、傷がすぐに治ったり、重たいもんも持ち上げられたり、それもこれも魔力によって肉体が強いものに《変異》してるからということになる」

「お母ちゃんが世界を守ってたとか、信じられへん」
しんしんと積もる雪の寒さも気にならないほど、星河は考え込んでいる。
「あくまで昴の家がこの場所をずーっと昔から守ってきたというだけのことや、お婆ちゃんも、ひぃ婆ちゃんも、その前も。そんで、星河はどうする？」
「……どうするて、うちがその守護者になるかどうかってこと？」
「そうや」
母はこっくりとうなずいた。
「そんなん……いややわ。戦うとか、できる気がせえへんもん」
星河は正直に打ち明けた。
話を完全に飲み込めたという訳ではないが、それでも自分がよくわからない魔界とやらからこの世界を守るために命をかけるなど想像もできなかったし、命をかけられるとも思えない。母が命をかけていることすら信じられなかった。
「まともな答えやね」
母は納得する。
「星河の気持ちがそうやったらそれでもええ。けどな、これだけは言うておく。残念ながら、資質があるとわかった時点で、どの道へ進もうとも決して自由にはなれへん。あんたには生涯監視がつくし、様々な制限が待っとる。もしならんと決めたら、あんたはおそらく昴の家から遠ざけられる。ここはどうしても魔力の影響が強い場所やからな、その後も、たとえば住む場所も自由には決められへんかったり、職業選択も限られる。結婚もダメな場合がある。海外へも出られへん、国内の移動も事前に許可をとらなあかん。挙げていったらきりがない。まあ、言うてもピンとこんやろうけど」
「……お兄とか、お姉たちはどうやったん？」
母の言葉に心細くなりながら、星河は尋ねる。
「お兄は資質があったけど守護者にはならん。男が守護者になるのは色々大変やねん。それに守護者の世界が昔っから圧倒的に女主導

っちゅうのもある。けど、大学出て官僚になった。簡単に言えば守護者のバックアップをするために政治の中枢を目指すっちゅうことやな、あっちは言うても男主導の社会やから、これは適材適所や」
「お兄も資質あったんや」
「あの子は十七のときやった。根が真面目な子やったから大分悩んだみたいやけどな。そんで宇宙(そら)は資質が出てない。穴の近くにずっと暮らしてて出てないんやから、おそらくないんやろう。だからなにも知らんと普通に大学生やっとる。この場合は知らない方が幸せやろう。一族やから監視がないわけやないけど、実質的には普通の子とそんなに変わらん。こういう場合は一生出ないことを祈るしかない」
上の姉について語るとき、母は表情を曇らせる。
星河は唇をきゅっと結ぶ。資質がないことで自由ではあるけれども、家族からはすこし外れてしまう。それはなんとなく心苦しいことだった。
「銀河(ぎんが)は十二で資質が出て、守護者になるために学校に行っとる。跡を継ぐ、と言ってくれとるな。歌手になりたいゆうてて、お兄と色々話し合った末のことやから、すんなりという訳でもない。あの時点ではあの子以外に後継者候補もおらんかったから、お母ちゃんもかなり無理をゆうた。今はわかってくれてるとは思うてるけどな」
下の姉について語るとき、母は申し訳なさそうに言う。
「うちが選べるんは、銀河姉のおかげなんか」
俯いて、星河は言う。
「そういうことや。けどな、そのことで星河が遠慮する必要はない。色々あったんは確かやけど、それはそれや、最後に選ぶんは本人やからな」
「そやろうけど――」
星河は顔を上げて、母の目を見る。
「――ひとつ聞いてもええ？」
「ひとつと言わず何個でも聞いたらええ」

「ひとつでええんよ。お母ちゃん、守護者やってて死ぬと思ったことある？」
「ある」
娘の言葉に、母は即答した。
「それこそ何度もある。もう十年ぐらい前になるけど、後輩が死んだのも見た。自分がいつ死ぬかもわからん。まあ、給料は悪くないし、色々特典もある。けど、割に合うかどうかは保証できんわ。やるかやらんかは気持ちや。あんたに守りたいものがあるかどうか」
「守りたいもの……か」
母の言葉に、娘はうなずく。
星河自身、意外なほど、その感情はしっくりと馴染んでいた。
「あるよ。うち、守りたいもの。お母ちゃん。うち、お母ちゃんも、お父も、お兄も、お姉たちも、みんな。そやから、助けになるなら……」
家族を見捨てる気にはならなかった。
「そんなにすぐ決めんでもええんよ？　考える時間ぐらいは取れる」
そう言いながら、母は嬉しそうに笑った。
「うち、なるよ。守護者に」
星河も笑う。
そうして彼女の守護者への道がはじまった

♭1　昴　星河（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

♭2　イワしたる

星河の訓練は放課後、母の直接指導によって行なわれた。
生来、真面目な彼女は、友人らとの約束を断ち、学校が終わるとまっすぐ古墳に向かった。吸収した分の魔力を活動で消費するバランスを身体に叩き込むこと、それが第一歩である。
そして同時に守護者として必要な戦いの基礎を習う。魔法とは言うものの、魔力は肉体から離しては使うことができない。魔力が攻防においてその力を発揮できるのは、使用者の意志と接する範囲であり、それ以外では大気中に霧散してしまう。
ともあれ、母が投げる岩石をひたすら砕く。それが星河に与えられた課題だった。もちろん心得などない彼女は、ソフトボール大に砕かれた古墳の一部を投げつけられる度に傷だらけになったが、次第にコツを掴み、半年も経つと自分と同じぐらいの大きさの岩ならば、十数個一度に飛んでこようとも両腕両脚をフルに使って粉々にできるまでに成長した。
「――でも、守護者って不便やわ」
夕方からのトレーニングを終え、ストレッチをしながら星河は呟く。季節はすっかり夏になり、寒くはないが、Tシャツとハーフパンツは汗でびっしょりである。
「なにがや？」
普段着にエプロンをつけたどこにでもいる主婦然とした母は、粉々になった岩石は自動的に集まって大岩に戻るのを待ち、古墳を元通りにしながら答えた。
異様だが既に日常の光景である。
「ゆうたら、地上で魔力がようさんある場所やないと戦えへんのやろ？　ここかて、ふつうの人には見つからへんようになってる結界の中だけってことやん。敵さんが来たかて、戦うには中に来るまで待ってなあかんってことになる。どう考えても不便や」

「あんたがそんな心配するんは十年早いわ」
古墳のバランスを整え、背中を向けたまま母は娘の心配を鼻で笑った。
「敵がなにかもわからん癖に。ちょっと余裕でたらこれや。生意気っちゅう……」
「お母ちゃん！　うち、マジメにゆうてんやから――」
星河は抗議する。
「方法はある！」
娘の言葉を大声で遮って、母はくるりと振り返った。
「そないなこと、だれでも考える。あんたがゆわんでもな！」
キッパリと言って、深く息を吐いた。
「――……どうやって？」
星河は首を傾げる。
「鍵や」
「かぎ？　キーの鍵？」
「キーの鍵やもちろん。そろそろ頃合やろうとは思って上に頼んでた」
そう言いながら、母はエプロンのポケットからキラキラと輝く半透明の物体を取り出す。鍵と言われればレトロな鍵の形をしてはいるものが二本、一本は黄色に輝き、もう一本はほぼ透明に近く、辛うじて月明かりに照らされてその形を確認できる。
「受け取り」
そう言って、透明な方を投げる。
訓練で慣れた動きなので、星河は動ずることなくキャッチした。
まるで重量を感じない透明の結晶は冷たくもなければ温かくもない。それどころか感触さえ定かでなかった。石や金属の類ではない不思議なものであるということがすぐにわかる。
「……なんなんこれ」
「守護者の鍵。これまでの訓練は、それを使うための準備に過ぎん」
母は娘に向かって黄色い自らの鍵を掲げる。

「見とき」
呟いて、その先端を自分の胸に一気に押し込む。
「え？　なんや？」
驚いた星河だったが、それはすぐに別種の驚きにとって変わられる。
母が胸元に当てた手をゆっくりどかすと、そこには黄色の輝きがある。そこから首、顔、そして腕、脚へと光が走り、年齢相応にゆるんだ身体は見る間に引き締まっていく。ほんの数秒後には子供を産む前、写真でしか見たことのない麗しかったころの母がいた。
「お母ちゃん、それ……どないなってんの？　痛くないん？」
なんと言っても鍵が胸に刺さっている。
「……爪弾くは荒ぶる調べ――」
厳かに母は口を開いた。
「アホか！　プリキュアはどうでもええわ！　どんだけ根に持ってんの？」
まるでわかっていたかのように娘は速攻でツッコミを入れた。
「――あかん、そないやいやい、やる気なくなるわ」
「お母ちゃん！」
「知らん、お母ちゃんなんも知らん。この姿を見て、まず真っ先、褒めてもくれへん娘なんか知らんよ。あああ、可哀想やわ、六人も子供産んでお母ちゃん可哀想！」
ぐにゃりと全身の力を抜き、母はぺったりと地面に伏せた。
「可哀想て……」
呆れながらも、脚を百八十度開脚し、ぴったりと折り畳まれた柔軟な姿に星河は驚く。
「……お母ちゃん、美人や、うん、たぶん日本一やな」
「ほんまに？」
「ほんまほんま、三十代部門なら世界一でもええよ」
子供か、とツッコミたいのを堪えて、娘はにこやかに答える。
「そうか、お母ちゃん世界一か！」

「よ、お母ちゃん世界一！」
胸を張って立ち上がる母を、星河は拍手で囃したてる。
「そうやろ、このツンと上を向いたる乳も、キュウッとくびれた腰も、バンとした尻も、あんたら産んでくたくたになる前は世界一やったんや！　そらもうモテてモテて大変やったんやで？　聞きたい？　お母ちゃんの花盛りの君たちへ？　聞きたいやろ？」
「え？　あぁ、聞きたいわぁ、うち、ほんま……」
早くもウンザリしはじめた娘を他所に母の長話がはじまった。
一頻り語り終えるころには、あまりの長尺に星河など空腹のあまり抱腹絶倒である。
「――っちゅうことで、あんたのその小学生にしては立派な乳もお母ちゃんの遺伝や、感謝しいや……あれ？　なんの話してたんやっけ？　星河？」
「ええよ、お母ちゃん。今、お父をどうやって落としたかって話や」
「あ、ああ……ま、それはええな。で、守護者の鍵やけど」
「やっと戻った」
娘は小声で呟いた。
「なにブツブツゆうてんの？　ここから大事やからな、ちゃんと聞き」
「……はい」
抵抗する気力もない。
「この鍵には二つの重要な効果がある。ひとつは魔界の穴を切り取って守護者自体に直接魔力を供給するちゅう、あんたが最初に言った、戦う場所を限定する条件の解除やな。ベースになる穴が塞がったりせん限りは、どこでも使えるし、その供給量も限りない」
人差し指を立て、母はそう言って親指も立てる。
「ふたつは経験の蓄積や。すべての鍵は、これまでに守護者が行なった戦いの記録が刻まれ共有されとる。情報量が膨大やし、使用者の実力に応じてしか引き出せへんものもあるけどな。それでも、鍵を使いさえすれば、専門的な格闘技を習う必要はほぼのうなる。基

礎としてあれば身体がスムーズに動くけどな、それはおいおいでええ」
「その、胸に刺して痛ないん？」
星河はずっと気になっていたことを再度尋ねた。
「これか？　痛ないよ。この鍵は境界で出来てる、ここにあって、ここにない。つまり、これが肉体に影響を与えることはない。お母ちゃんもこれは説明しててよおわからんけどな」
母は高らかに笑った。
「さよか……」
娘は脱力感に肩を落とす。
「まずは自分で使って確かめることや、おいで」
母はそんな星河の腕をひっぱり、古墳の目の前へ連れていく。
すっかり夜も更け、濃い影を落とす巨石群が少女を見下ろす。それは魔力を適度に吸収し、風化に耐えることで、地上に放出される魔力の量を抑えてきた、魔界の穴を塞ぐ重石のようなものだった。いくら砕いても元通りになる、魂を持った石。
「どれでもええ、鍵を当ててみ」
「うん」
星河は手近な岩肌に確かめるようにゆっくりと透明な鍵を挿す。豆腐に箸を立てるように、それは音もなくするりと飲み込まれ、じわりと光を抱いて輝き出す。
「あんたも黄色やな」
「色に意味あんの？」
「ない、性格が出るっちゅう噂もあるけど、血縁では大体一緒やからな」
「そうなんや」
光のぶん少し温かみを感じる鍵を引き抜くと、星河はそのまま自分の胸に押し込んだ。まるでそうしろと言われてるようでもあったが、同時に自分の意志であることも確かだった。
これまでより強く魔力が身体を《変異》させようとしていること

を感じる。
「どうや？」
「なんか、気持ちええ……」
答えながら、しかしどこか上の空で星河はつぶやく。
「そやろうな、守護者の鍵は、理性が閉ざしている欲望のタガという鍵を外す、そんではじめて魂の深いところまで当人の望むものを《変異》として引き出せるわけやから――」
母は娘の様子を見て話をつづけるのを止めた。
「……気持ちええ」
焦点の合わない目をとろんとさせて、しかし星河は内側から溢れてくるエネルギーのやり場を探していた。暴力的なまでの衝動、その対象を。半開きになった口で荒く息を吐き、そしてすぐ側の『的』を見つけるのに時間はかからない。
「――よし、正気に戻るまで一丁やろか」
「……あ」
理性が答えを出すより早く、星河の拳が暴発した。
「ちょっと痛いけど覚悟しい」
母は娘の拳を受け止め、何十倍にもして返した。

それから数日後、昴家が管理する古墳を含め、全国の魔界の穴に対する大規模な襲撃が起こった。メインターゲットとされた聖木乃女子学院ほど顕著な被害は出なかったが、戦いの中で星河の母、そして候補生であった姉も、被害を受けることになる。
鍵を手に入れたばかりの星河自身は自分も戦うことを希望したが、当然、許されなかった。彼女は未熟だった。ただ、荒れ果てた古墳の惨状と、魔力をもってしてもすぐには癒えない痛手を負った母と姉の姿を強く胸に刻むことになる。首謀者のひとりとされる守護者の裏切り者、聖（ひじり）の名前と共に。
「――星河、あんた、聖の学院に行く気はあるか？」
再びの冬、母との訓練の最中、星河は不意にそう告げられる。

襲撃以降、更に熱心に研鑽を重ねた結果、彼女はめきめきと実力をつけている。それでも母が本気さえ出さなければウォームアップになる程度というところではあるが。
「いや？　行かへんよ？　うちは、お姉と同じ学校行くし、なんで？」
突きのフェイントを読み、ハイキックをかわして、答える。
「結局、夏のことでハッキリしたんは、守護者も平和な時代がつづいてもうて、実戦から遠ざかってたっちゅうことやった。お母ちゃんにしても本気を出すんは十年ぶり、四度目、数えるほどや。鈍ってた」
かわす娘を楽させない連打で追い込みながら、母は言う。
「そう感じた人間はどうやらようさんおるらしい」
「？」
なにを言われているか計りかね、星河の動きが鈍る。
「そこっ！」
すかさず、母の身体が懐に潜り込み、肘が娘の下っ腹を打ち抜く。軽く浮いたところを流れるように顔面をつかまれ地面へ叩きつけ、首を押さえ込まれた。
「……げは」
「にわかに聖の学院がある、あの街が最前線になってきとる。これから守護者になろうゆう連中の中でも、特に上を目指すもんは、実戦により近い場所を求めて集まりつつあるっちゅう話や。そん中には、聖の娘もおるらしい」
「！」
倒れたまま聞かされた話に、星河は目を見開いた。
「まあ、正直に言えば、この話はお母ちゃんらの都合もある。特に古くから魔界の穴を専属で守っとる一族にとって、その代表格のひとつである聖の裏切りはインパクトがでかかった。実際、国内では危険度があがっとるあの街にだれも送り込まんようでは体面がない。無理強いはしたくないんやけど、銀河はまだ回復に時間がかかるし、

都合がいいのはあんたしかおらん」
申し訳なさそうに言うと、母はゆっくり立ち上がった。
「お、お母ちゃん」
喉を押さえながら、星河は声を振り絞る。
「うちが……聖の娘をイワしたったらええんや、ろ？」
かすれた声でそう口にして、にやりと笑う。
「……そこまではゆうてへん」
「同じことや」
鼻の頭を掻いている母を見上げて、星河は呟いた。

♭2　イワしたる（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
作中に登場した襲撃事件については前作「正義の街」（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１２５２ｔ／）をお読みいただければ詳細がわかります。登場人物についても引継ぎがあります。ただ、これは単にストーリーの起点であって、読まなくとも本作を読むのに支障ないように書いていきますので、あらかじめご了承ください。

#3　そういう世界は違わなくて。

だいたい、体操でトレーニングには慣れてて。

平日の朝夕、休日のほとんど、そんなスケジュールも変わらない日常で、退屈して。たしかに魔力を取り込んで身体が《変異》とかして、バック宙が一回転は余分に飛べるとか、ムチャして筋を痛めてもすぐ治るとか、実感はあったけど、神社を出たらその効果も切れて、競技会で披露できるわけでもなくて、結果に結びつかないから、あんまり、ううん。

ぜんぜん、楽しくなくて。

「学院に行けば同じ条件で競い合う仲間ができるから、辛抱して」

平島さんはそんなことも言ったけど、あんまり期待、してなかった。

それで春休みは「お別れだから」とか言って、友だちと遊び倒して、入学式前日ギリギリまでねばって、寮に向かうことにした。無理すれば通えないこともない距離で、お父さんもお母さんも無理して欲しそうだったから、逆に、ちょっと反抗してみて。

出発するとき、ふたりとも泣いてて。

「泣かないでよ、いつでも帰れる場所なんだから」

言いながら、ほんとうに家を出るんだって思ったら、気分がはずんだ。まるで床を蹴った瞬間に着地の成功まで見える瞬間みたいな、冴えたイメージ。

「行ってくるね」

真新しい制服の匂いに包まれて、期待してなかったはずなのに、キャリーバックを引っ張る脚も軽い。わたしは、中学生になる。新しい世界へ、やっと。

ステップを上がれる。

なんども通過していたのに印象のなかった木乃の駅は仮設だった。改札を抜けると、駅前は工事現場のまっしろな囲いと青空とぴかぴ

かの建物が描かれた看板で、今年度中にはおおきなショッピングモールが建つらしい。イメージアップが、なんだか現実的すぎる。
魔法で消し飛んだなんて、だれに言っても信じてもらえそうにない。
平島さんには「だれにも喋っちゃダメだから」としつこいぐらい言われて、喋ったらわたしだけじゃなくて、その話を聞かされた人もふつうの生活には戻れない、なんて、おどかされたけど。秘密の話があんまりウソっぽいから、喋ろうって気になれなくて。
そこはワクワクする気持ちを裏切られてた。
でも、学校からすぐに遊べる場所ができるなら『ふつう』にいい。
考え方。ふつうじゃないことを楽しむのも、ふつうのことを楽しむのも、両方あり。そう思ったら、学校が二倍楽しめるような気がして。だから、わたし。
向かう先がライバルだらけだってこと、忘れてた。
「――聖木乃女子学院寮前」
専用のバス停、中等部から大学部まで希望者すべて入っているという寮は、ヨーロッパ風の建物が何棟も並んで、その間にはレンガ敷きの道、オシャレな街路灯と、青々とした街路樹、パンフレットで見てはいたけど、そこだけ別の街みたいになってて。
「あー……」
ちょっと、引いた。
体操の世界でもそうだけど、すごい人は、すごい大事にされる。
そういう世界は違わなくて。
ここにもある。
現実的に。
だから、カラフルな洗濯物がなびく女子寮街の奥の棟「かえで」に着いたときには、楽しい気持ちはぺしゃんこに潰れてた。身体の動きが決まらないときの、重たいイメージ。
自動ドアの玄関ロビーへ、のろのろと。
「ようこそーっ！　かえで寮へ！」

パンっ！　と明るい声といっしょに、紙テープが視界にひろがって。
「はい？」
「こんにちは、今日、入寮の府本里美ちゃんでしょ？」
たったひとりでわたしにクラッカーを向けている女の子がいた。たぶん年上。かなり大柄。同じ制服を着ていて、趣味の悪いピンクのエプロンを着けて、蛍光グリーンの髪の毛が上へ立っていて、それらにも負けないパンクなメイクをしてて。
生活感があるやら、ないやら、
「……はい、府本です」
理解できなくて、ほかになにも言えない。
「ようこそようこそーっ！　ここの寮長をしてます。中等部三年、戸田圭子です。捕捉すると、生徒会の副会長でもありまーす。困ったことがあったらなんでも訊いてね？」
「……」
名前ふつう！　生徒会副会長？　気さく！
リアクションに困ることがたくさん。
「ささ、まずは部屋へ行きましょう。二人部屋なのは聞いてるよね？」
「あ、はい」
「荷物の到着順で部屋割り決めてるから、里美ちゃんは３０８号、これカードキー」
言いながら戸田さんはカードをわたしに手渡すと同時にキャリーバックをひったくって歩きだす。ついて行くしかない。
「一応、セキュリティでオートロック。守護者候補生ならドアぶっ壊せるし、ふつうの暴漢なんか相手にもならないけど、基本的には寮内は鍵の使用禁止だから。あ、『守護者の鍵』ね、カードキーじゃなくて、府本さんは『外の人（そとのひと）』だからまだもらってないと思うけど、入学式のあとすぐもらえるから」
「外の人？」

「ああ、そうだね。ここ、生まれで守護者関係の人とそれ以外の人は区別されるから。ちなみに私も外の人。逆に『内の人（なかのひと）』もいるんだけど、内の人の内側でも区別があって『家持ち』とそうじゃない人が……それはどうでもいいね」
戸田さんはどんどん喋って勝手にうなずいて。
どうでもいいのかな？
「朝食と夕食は一階の食堂、こっちの奥」
エレベーターのボタンを押しながら戸田さんはどんどん説明する。
「朝食は午前六時から七時半、夕食は午後六時から八時、お昼はここのキッチンでお弁当も作れるし、買って食べてもいい。手引きの通り。里美ちゃんは食品にアレルギーとかある？」
「え？　いいえ、別にないです」
「そう？　あったら言っておけば別メニューにしてもらえるから、遠慮しないでいいよ？　あとは、寮の門限も八時、遅れると罰があるので注意して。休日遊びに行く時は外出許可が必要で……みたいな細かいことは入寮の手引きに書いてある通りね」
「は、はい」
すぐにエレベーターはやってきた。
「お風呂は食堂の反対側、各部屋にシャワーはついてるけど、大浴場は広くて気持ちいいよ。サウナもあるし、利用する人は多いね。水着は禁止、なんでかはわからないけど。伝統？　あと掃除はこまめにとか、ゴミの収集日とか、そのあたりは」
「手引きですか」
わたしは、先回り。
「そうだね、うん」
戸田さんは笑顔でうなずく、蛍光グリーン髪が揺れる。
三階へ移動して、エレベーターホールから左手、一番奥が３０８号室。
表札には『昴　星河・府本　里美』の文字。
すばる、ほしかわ？

「じゃ、同室の星河(せいが)ちゃんと仲良くね？」
「あ、ありがとうございました」
せいが、って読むんだ。
情報量にくらくらしながら、ともかく頭を下げる。
「いえいえー、学年違っても、条件は一緒だから、お互い頑張ろうねー」
戸田さんはさわやかに手を振って来た通路を戻っていく。
わたしは、深呼吸して。
なんだか、あれよあれよと連れてこられちゃったけど、これからしばらく一緒に暮らす人と顔を合わせる緊張がやってきてた。人見知りはしない方だけど、第一印象はとても大事。好かれなくてもいいけど、嫌われたり、疎まれたりするのはよくない。
学校生活が楽しくなるかどうかのポイントになる。
「すばる、せいが」
名前を、つぶやいてみて。
まるで技にはじめて挑戦するときのような、もやもやしたイメージ。
でも、イメージにとらわれてはいけない。お父さんはよくそう言ってて。まずはやってみる。そしてあとは修正していけばいい。それは体操でも、人と人との関係でも、同じだって。
チャイムを押す。
ぱたぱたと軽い足音で、彼女はすぐに出てきて、迷わずドアを開けた。
「どちらさん？」
ジャージ姿の昴さんは、わたしの頭から足の先まで、遠慮なく見て、首を傾げる。
「同室の、府本里美です」
相手がそうなので、わたしも遠慮しない。さらっとした長い黒髪に、白い肌、すこし垂れ目、ちょっと低い鼻、厚ぼったい唇、丸い顔、バランスは美人。けど、なにより目を惹くのは、大きな胸とく

びれた腰、野暮ったいのに、スタイルの良さが隠せない。
なんだか敗北感。
「うちは昴星河。なんや……ちっこくて可愛い人で良かったわ」
昴さんは恥ずかしそうに笑いながら、言って。
「は……」
悪気はないとわかってても、わたしは、言葉に詰まった。
ちっこくて？　そう、お父さんとお母さんにもらった、体操向きのわたしの身体。おっぱいもおしりも小さくて、でも鍛えたから脚は太いし、肩幅も胸囲もあって、しなやかだけどやっぱり筋肉だから、女の子っぽくなくて、髪形も地味にまとめてて。べつにコンプレックスじゃないし、誇りすらあるけど。
でも、それでも、言われてうれしく、ない。
あっちが明らかに優越感を持ってる場合は、とくに。
「どうしたん？」
たぶん、褒めたと思うし。
「わたしも、なんか……おっぱい大きい美人で良かった、って言えばいい？」
けど、嫌味で返して。
「……はぁ？」
初対面から、ほんの一分。
わたしたちは、もう、ライバルだった。

#3　そういう世界は違わなくて。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

#4　「よろしく、おねがいします」

手引きによると。

相部屋には、競い合うと同時に仲間意識を高める、目的があるそうで。けど。

「なんやねん、ややこしいっ」

「……」

人によるんじゃないかな。

わたしが先に届いていた荷物を開けて整理している間、昴さんは、自分のベッドの上に説明書を広げて、ケータイに悪戦苦闘中。わたしに聞かせたいのかどうか、独り言が多くてわかったのだけど、どうやら中学に上がるので買ってもらったらしい。はじめてって、いまどき珍しい人だ。新しいからとかそういう理由で選んだっぽいイエローのスマホ。

それがわかるのは、わたしも中学入学で機種変してて。

同じ機種の色違いっぽいからなんだけど。

「ワイヤレスネットワークってなんや、ぶるーとぅーす？　おまえもか」

知らんぷりして黙っとこう。

こっちからケンカ売ったわけなので、助けを求められるまで、助けない。

自分で覚えた方がいいと、思うし。

十畳よりは広いフローリングの部屋には、入ってまっすぐ正面中央に広い窓とベランダがあって、シンプルな木の机と同じ素材っぽいベッドが左右の壁にひとり一セットずつ、クローゼットも一つずつ、部屋の中央にはテーブルが一つ、玄関からの通路脇右手に小さいガス台と流しのキッチン冷蔵庫一つ、左手にユニットバス、エアコン。食堂や大浴場がなくても暮らすには十分なものが揃っている。

荷物の片付けは昼前に終わって。

しばらくは食べられないから、とお母さんが持たせてくれたお弁当を食べようかな。
と、テーブルの上にピンクの包みを置いて。
「……」
「……」
昴さんと目が合った。
それで、わたしは、気づく。このテーブル、もしかして？　って。
落ち着いてみると、クローゼットやベッドや机とは違う安っぽさ。ペラッとしたツヤのある黄色。コンロの上に乗ってるヤカンも同系色。座っているベッドのシーツ、窓のカーテン、これみよがしに彼女が着ているパーカーも、うるさくならないぐらいの統一感を持たせてイエロー。
染められてる、この部屋。
そういうこと、まるで考えてなくて。ツメが甘い。
思わず唇を噛む。
「食堂で、食べよっかな……」
気取られないように、自然なフリでゆっくり、わたしは包みを掴んで外へ出ようと立って。
「べつに、使うてもええよ？」
背後から昴さんに呼ばれる。
「……」
くっ。
先手、取ってるつもりが、取られてて。
くやしい。
「そう？」
声だけは平然と、答えて。
これをムシしたのでは、イコジになったと思われて、負け。
振り返って。
「うちかて、そのつもりで持ってきたんやし？」
穏やかな微笑みを装った、昴さんの勝ち誇りの表情が目に入る。

実力差があきらかな競争相手が格下に向かって「おたがいがんばりましょうね？」とか言うあの感じ。体操では、何度も格下の立場で味わってる、けど。

ここの世界で、それに甘んじたくない。でも。

「……昴さんは、お昼、いいの？」

この状況を逆転する手がすぐには、思いつかなくて。

「これ終わったら、な」

薄く笑いながら、再びケータイをいじってる彼女を見るしかなかった。

「そっか」

第一ラウンドはわたしの負け。

それほどのこと？　って、たぶん言われるだろうけど、これはプライドの問題。常日頃から積み上げられた勝敗が、最終的に力関係にも影響を与えるって、わかっていればこそ。さすが関西人、小さなことからコツコツと、いやらしい。

わたしも、だけど。

小さい身体を、もっと小さくしながら、包みをほどいて。

お弁当は、いつになく気合が入っていて、わたしの好物ばっかり。手作りだとわかるおおきなロールキャベツ、たまご焼き、ポテトサラダ、そぼろご飯――それが、もっとくやしさに拍車をかけて、重たくて。お母さん、ごめんなさい。

涙が出そうで。

「おいしそうやね？」

昴さんの追撃に血液が沸騰しそうだった。

そんなこと言われたら。

「まだ、お箸つけてないから、食べる？」

こう返さなきゃいけなくなる。

相手を睨まないように顔を上げて、自分でもわかるくらい、引きつった笑顔で。これもムシしたら、つけあがらせるだけだから。怒りを飲み込んで。

「なんや、催促したみたいで悪いな、ええんよ？　うちのことは気にせんでも」
言わせたクセに。
「こっちこそ、わたしだけ食べるなんて、悪いから」
ここはガマンだ、わたし。
「お近づきの印に」
「そやな、そうまで言われたらな……」
「どーぞどーぞ」
昴さんにお箸を差し出して、わたしは顔を伏せる。噛み締めた奥歯がイタい。
「そやったら、一口」
そう言って、昴さんはロールキャベツの中央に箸を立て、半分に割った。崩れないようにしっかり煮たキャベツはさくっとそれを受け入れて、たっぷりとスープの染み込んだ中身をさらけ出す。滴る肉汁、冷めてもおいしいのをわたしはよく知っていて。
よだれを、飲み込む。
「いただきます」
え？
そのまま？
昴さんはロールキャベツの半分をそのまま、箸でつまみ上げる。それは冷凍食品のロールキャベツなら三個分ぐらいはあるはずなんだけど、おおきく開いた口へ。
一口で。
おおきいよ！
「……ん、んまいなぁ」
口いっぱいに噛み締めて、昴さんは目を輝かせて。
「いけるわ。これは」
さらにたまご焼きを間髪入れずにさらった。
そのとき、わたし、かなりマヌケな顔してたと思う。たぶん。
昴さんは一切こちらを見なかった、ためらう素振りもなく、すべ

てのメニューをおおきな一口で奪った、ざくざくと、情け容赦なく。寸断されたロールキャベツと、山崩れを起こしたポテトサラダと、路頭に迷うたまご焼きと、掘り返されたそぼろご飯、跡形もない。
わたしのお弁当が、昴さんの残したお弁当にランクダウン。
「おいしかったわぁ、ありがとうな？」
ほんとうの満足感が彼女の顔にはありありと。
「それはよかった……」
わたしはその顔から視線を外すために返された箸の先端を見つめる。
さすが関西人、コテコテに、あつかましい。
わたしが、食べるように言ったんだ。それはわかっていても、きっとコモンセンスなんて共有してないとわかっててもこの感情は、うらみ。食べもののうらみ。
わすれない。
ぜったい、わすれない。
のろのろと、それでもおいしいお弁当を食べている内に、いつの間にか、昴さんは部屋から消えて。わたしは空のお弁当箱を流しで洗って、ぼんやりとその午後をひとり過ごした。ケータイが何度か鳴って、メールの一通がお母さんからで、ちょっと泣いて。南向きのベランダから、斜めに西日が射して、わたしの方のベッドを照らす。
そして日没。
「うわ？　なに？　まっくらにして……府本さん、夕飯は？」
八時過ぎに部屋に戻ってきた昴さんが電気を点けてわたしを見ておおげさに飛び退いて。さすが関西人、ハデなリアクション、うっとうしい。そう思いながら。
「食欲、なかったから」
わたしは、それだけ答えて、部屋でシャワーを浴びて。
読むでもなく、机に手引きを広げて座って。
無言のまま。

「消灯、十一時やねんけど、どうする？　起きててもええけど」
「いいよ、べつにそれで」
就寝。

わたしは、気づくと教室の席に座っていて。
制服とかもきちんと着ていて、胸には飾りがついてて。
「――聖（ひじり）、勇希（ゆうき）……よろしく」
目の前ではすらっとして背の高くてやたら目鼻立ちの整った美少女としか言えない子が、か細い声で自己紹介をしていて。まるで現実感なくて。
「次の人」
教室中の顔がみんなわたしを見ていた。
「……え？」
あれ、入学式、終わってる？
「次の人、府本さん？　起きてる？」
教壇の上で、女の先生っぽい人が首を傾げてて。
ひじり……、は、ひ、ふ。
「わたしの、番？」
名簿順に座らされたような。
「そうよ？　大丈夫？」
その先生が言うと、教室に笑いが起こって。
「だいじょうぶ、です」
ぼーっとした頭のまま、立ち上がって、教室を見渡して、そして。
「あっ！」
心配そうな顔をしている昴さん見つけた。クラスメイト？
「ど、どうかした？　府本さん？」
「……いえ」
どれだけショック受けてたんだ、わたし。
教室中がわたしを心配していた。入学式から心ここにあらずの同級生がいれば、わたしだって心配する。恥ずかしい、どうかしてる。

自分で思っていたより、緊張していたのかもしれない。魔法とか言われて、半年。見知らぬ世界へ、わりと理解しないまま飛び込んでる。けど。

たしかなことは、ひとつあった。

守護者になる。

才能がないと見放された体操ではなく、資質があると言われたわたしの力で。

「……府本、里美です。わたしがここに来たのは――」

ほんとうの、世界で。

「――みんな蹴散らして、勝って、守護者になるためです」

教室がざわめいて。

だれかは鼻で笑って。だれかが息を飲んで。

目の前の美人は無表情で。教壇の先生は驚いた顔で。

昴さんは眉をひそめて。

「よろしく、おねがいします」

＃4　「よろしく、おねがいします」（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

#5　自意識過剰、極まってて。

自己紹介も終わって。
魔法とか守護者とか関係なくホームルームが進んで。
「――では、クラス委員は礪波（れいなみ）さんに決まりました」
先生が拍手して、みんなも合わせて拍手。
黒縁のメガネにおさげ髪のいかにも適役な子が、その雰囲気で選出されて。
「あらためまして、礪波命（みこと）です。今年一年、微力ながら、みんな仲の良いクラスになるようにがんばりたいと思いますので、ご協力お願いします、ね？」
なんだか、わたしを見て言った、ような気がする。
教室にクスクス笑いが起きたから、きっと、もう問題児あつかいになってるっぽい。自己紹介だけでクラスの和を乱すとか、そんな感じ。わたしは机に頬杖。協調性とか、同調圧力とか、こういうところも、魔法とか守護者とか関係ないらしくて、つまんない。
なーなー、ってこと？
そんなだから、裏切り者が出て、魔界の穴が危機、とかなっちゃうんじゃないかな。なんて真剣に思ってもないわたしだって考える。
「特別な力を使うのだから。おたがい緊張感をもって監視し合うべき」って言ってたのは平島さんだったけど。
ほんと、同感。
「――それでは、先程説明した通り、今晩八時に高等部中庭で『鍵』の授受を行ないますので、まだ持っていない人は忘れずに、授業は明日からになります。お疲れさまでした」
昼前に解散、でも。
本番はここから。先生が教室を出ていく。配られたプリント類をカバンにしまいながら、わたしは周囲に注意を払う。自己紹介であれだけケンカを売れば、だれかしらが買ってくれるはず。とりあえ

ず、この場所での実力が知りたい。まだ鍵を貰ってないから、魔力は使えないけど、同じ条件で競うなら《変異》前のベースで十分だって。
ならば、好戦的で、自分に自信を持ってる相手が、力を量るには丁度いい。
「……さてと」
つぶやいて、立ち上がる。何人かの視線がこちらを向く。いい感じ。
さあ、トレーニングの成果、試させて。
カバンを肩にかけながら、目が合う相手を探す。そして。
「待ちぃな、あんた」
教室の前の方から、一直線にこちらに向かって歩いてくる、彼女がいた。
厚めの唇をへの字に曲げて、鼻息も荒く。
「やっぱり……」
思わず、笑ってしまう。だろうと思ってた。
それでこそ、ライバル。同じ部屋になったのは偶然じゃなくて、必然だって。
昨日のお弁当のうらみ！
「聖ぃっ！」
彼女は机に、どんっ、と手を突いた。
「……」
そして、にらみ合う。
「すば……え？」
言葉に詰まったわたし、じゃなくて。
わたしの前の、カバンを両手で持ち、楚々と立つ、聖さんと、にらみ合う。
「……なにか、用？」
昴さんの威圧に整った表情にかげりひとつ見せず。
「なにかやあらへん！　わかっとるやろ！　この学院の、前理事長

の曾孫！」
その動じない態度が気に入らない風で、昴さんは怒鳴った。
教室中が注目している。最初から、見られていたのも、わたしじゃなかった、とか？
曾孫。聖。そうか。わたしは、ポンと手を打つ。聖木乃女子学院の「聖」は苗字、ひとつ勉強になりました。じゃなくて。わたし、今、すっごいカッコわるい！　ケンカ売って、買ってもらったものだと相手を間違えるなんて。それもライバルだなんて。自意識過剰？　頬に手を当てると、もう顔が熱い。こそっと着席して、目の前の二人の成り行きを見ることにする。
ちいさくなって。
「なんとか言ったらどうや！」
「……」
怒鳴る昴さんに対して、聖さんは口元に手を当て、考える素振り。その仕草は様になってて。どちらかと言えば活発そうなショートカットだけど、こんな大きな学校を持ってた曾孫というだけあって育ちがいいのか、上品。小振りな唇と、さっぱりとした鼻筋、長い睫毛が憂いを帯びて、指は長くて、脚は細く、高い身長のわりに、おっぱいもおしりもないけど、それが逆に、しとやかに魅せる。
同じ美人でも、どちらかと言えば派手なタイプの昴さんとは好対照。
「……」
長い沈黙があって。
「なんとか」
聖さんが表情も変えず発した一言に、教室内を戦慄が駆け巡る。
マジで言ってるのか、ボケてるのか。
一番近くから見てるわたしにも、わからない。でも。
「古典的やけど、まぁ許すわ。ツカミとしてはな……」
明らかに苛立ちながら、けれど、関西人らしく笑いに寛容であろうとしてるのか、眉間に皺を寄せて、でも愛想笑いをして。昴さん

はうんうんと相手の肩を叩き、
「……でもな、そうやない。そうやないよ？　聖。うちがゆうとんのはな？」
優しく言いなおした。
「あんた」
「だれ？」
すっと、口元に当てていた掌を上にして聖さんは差し出して。
さすがに、場の空気が凍りついたのがわかる。
「だれ？　て、うちのことゆうてんの？」
昴さんの声が震えていて。
それは、まるで知り合いのように、ケンカ腰で攻めてて、相手が自分のことすら意識してなかったってわかったら、すっごいカッコわるくて、つまり、さっきのわたしみたいに。
自意識過剰、極まってて。
「昴、星河や」
「はじめまして」
とくに申し訳なさそうにでもなく、聖さんは頭を下げた。彼女からすれば、知らない、今日あったばかりのクラスメイトが、チンピラだったっていう感じ。でも。
「……はじめまして？」
自己紹介しなおして、なお否定された、昴さん。技は完成していたのに着地失敗して会場が溜息に包まれる、あの文字通り立場ないシチュエーション。残念感。
気の毒で、見てられない。
そう思ったのは、わたしだけじゃなかったらしく、ギャラリーの半数ぐらいはさりげなく教室を出て行って。わたしも、二人ともの視界に入る距離じゃなければ、間違いなくそうしたんだけど、あまりに近くに居すぎて、取り返しのつかない空気に飲まれてた。
「ちっ」
舌打ちをして、昴さんが、制服の上着ポケットに手を突っ込む。

すると、わたし以外のクラスメイトが身構える。
「だめ！　星河ちゃん、ここで鍵なんて使ったら！」
同時に、クラス委員の子が、聖さんを庇うように、正面に割って入った。
口ぶりから、どうやら知り合いらしい。内の人？
「どき、命」
「どかないよ。入学初日に学校壊すつもり？」
メガネのクラス委員さんは、そのレンズのしたの大きな瞳で、じっと昴さんを見つめる。
「……壊したかて、どうせ、こいつの家が金を出すだけや、かまわへん」
「そんなことしたら、星河ちゃん守護者になれなくなる」
「かまわへん！　あんたかて今のやりとり見てたやろ？　こいつがどないなつもりで守護者になろうとしてんのか、はっきりしたやないの。身内から裏切り者が出ても、なぁんとも思ってない！　せやから、うちの名前を聞こうが！　クラスメイトの名前のどれを聞こうが！　顔色ひとつ変えん！　自分の家の裏切りが他の家にどんな被害を与えたか、考えてもなければ、知ろうともしてない！」
昴さんは叫びながら、黄色に輝く鍵をかざす。
「やったのは聖さん本人じゃないでしょう？」
クラス委員さんは首を振った。
「だからなんや？　そんなん関係あるか！」
それでも収まらない様子の昴さんは、怒鳴って、鍵をおおきな胸に押し込む。平島さんが使うのを見たのも数度だけど、あれは守護者の鍵だ。近くにいるからか、肌に魔力を感じる。
「ついでや、なんもわからんのにそこにおる府本、あんたにもゆうとく」
そして不意にわたしを見て、言った。
「……わたし？」
たしかに、話の半分もわかないけど。

「耳かっぽじいて、よーく覚えとき？　この世界を魔界にしてしまわんために、世界中の仲間と協力するんが守護者や。なるためやったら周りを蹴散らすとかゆうあんたや、いつ裏切るかわからんそこのボンクラみたいなもんには、資質はあっても資格はない！」
「資格って……」
資質に目覚めたら、守護者になることしか選びようのないシステムになっている、と、わたしが反論しようとした、そのとき。背筋が凍った。
動こうとした、という気配もなかった。無言のまま、クラス委員さんの肩越し、聖さんの腕が素早く伸びて、昴さんのシャツの襟を掴んだ。反対の手が、紫色の鍵を握っている。
聖さんの、その涼やかな目には、隠しきれない怒気が溢れていて。
「……なんや、やるんか」
強がる昴さんふくめ、その場にいた全員、明らかに萎縮していて。だから。
反応が遅れた。
「ひ、聖さん！　待っ……」
クラス委員さんが叫んだ瞬間には、教室の窓ガラスが一枚残らず粉々に砕けて。
二人は消えてて。
ギャラリーも消えてて。
わたしと、クラス委員さんだけが残っていた。
「ほんと入学初日から、困ったな……。あ、ごめんなさい、ね？　府本さん。星河ちゃんはなんていうか、救いようのないほど物事の考え方が直線的だから」
メガネのつるを押さえて、微笑んだ。
「……えっと、れいなみさん？」
まったくフォローしてない気がして、わたしも思わずつられて笑って。
「命でいいよ」

「なら、わたしも、里美でいいです」
「里美さん」
「命さん」
わたしたちは、呼び合って。
「私も、追いかけようと思うんだけど、里美さん、まだ鍵持ってないよね？」
「ええ」
聞かれて、うなずいて。
「ここに置いていっちゃうとひとりだけ先生に叱られちゃうから、一緒に行かない？」
そう言いながら、命さんは自分の鍵を取り出した。緑色の鍵。
「おねがい、できます？」
割ってもいない窓ガラスで怒られるのは、おもしろくない。
「蹴散らさないでくれるなら」
「それはまた今度で」
わたしは妥協する。条件に差があるから。
「じゃ、今度」
命さんは鍵を胸にさし込むと、わたしを抱えて窓から飛び出した。

#5　自意識過剰、極まってて。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

#6　風でスカートめくれてて、見えちゃってて。

わたしの体重は軽いけれど、もちろん、十センチも体格が変わらない命さんがお姫様抱っこをしたまま走れるほどじゃなくて。ハードルみたいに窓枠をすりぬけ、三段跳びみたいに中東部校舎の中庭を横切るまで、ほんの一瞬、

「ゆっくり行くから」

そうつぶやいて、次の瞬間、忍者みたいに向かいの校舎壁面を駆け上がる。それはまるでジェットコースターみたいで、お腹の中がふわっとしてきゅっとなるスリルが、すっごく楽しくて。体操をはじめて、どんどん新しい技に挑戦してたころを思い出した。

命さんは四階の校舎を昇って、屋上のフェンスの上に立って。

「星河ちゃんはどこに……」

くるりと３６０度ターンする。たぶん、周囲を見回すため。

ぽかぽかとした春のうららかな青空と、敷地を取り囲む桜の木々、広々とした大学部のキャンパス、小さい子たちの楽しげな歓声が聞こえる隣の初等部、建て直し中の高等部と、その建物よりもずっと高く、帽子みたいにすっぽりと枝を広げている桜の巨樹は、学院のどの桜よりも濃く毒々しいピンク色。なるほど、あそこに魔界の穴が……。

「いた。と、里美さん、怖くない？」

「ぜんぜん」

ふつうに考えたら、高さ２０メートルぐらいの場所、平均台より細いフェンスの上で爪先立ちのターンをするのはスリリングだけど、命さんがそうすることに迷いがあるようには感じられなかったから、安心感すらあって、そう答えた。

「全然？　まったく怖くないの？」

驚かれて。

「うん」

「それは頼もしい限り」
ちょっとガッカリされたみたい。
体操初心者が怖さで身体がかたくなって簡単な技に失敗するのを見守るような気持ちなら、わたしにもちょっとわかった。優越感と、嗜虐心。マジメそうなのに、命さん、けっこういい性格してる。友だちになれそう。
「じゃ、跳ぶよ？」
わたしが、うなずくより早く、命さんは跳んだ。
さっきより、ちょっと本気。よっぽど怖がらせたいみたいだったけど、わたしの目はそれについていけてなくて、景色の色がぐるっと溶けて、青い猫型ロボットがやってきた引き出しの中みたいに現実離れしちゃったから、やっぱり怖くなくて。
「到着……うん、頼もしいね」
体育館上に着地した命さんが、わたしの顔を覗き込んでガッカリした顔をさせた。
アーチ状の屋根の上にはクラスメイトたちが既に何人もいて、端っこに立ってみんなひとつの方向を見てる。抱っこから降ろされて、わたしもその列に加わって、その視線の先に目をこらす。初等部から大学部まで共用の大きな図書館、その建物の中央に建つ時計台を挟んで、聖さんと昴さんは、風に吹かれてて、見るからに一触即発。
でも、ちょっと遠いな。
「もっと近くで見たいなー」
直線で１００メートル近く離れてる。これじゃよくわからない。
「手出しされたくないってさ」
クラスメイトの……名前を覚えてない人がわたしのつぶやきに答えてくれた。親切な人。割としっかりウェーブのかかった天然パーマを一つにまとめて、ちょっとお姉さん風味の……自己紹介でなんて言ってたっけ？　出てこない。ごめんなさい。
「ありがとう」
わたしは、ごまかす。

「いいえ」
あとで名簿をもう一回見とこう。
「そんな里美さんに」
そう言いながら横に立った命さんが、自分のメガネをわたしにかけた。
視界が変になって、その顔も見えなくなる。
「これで、もうちょっとよく見えると思う、ね？」
「え？」
わたしはまた図書館の屋根を見て、ビックリする。
ほんとうだった。
「すごい、なにこれ」
双眼鏡とか、そういう視野を狭くして遠くが見えるのじゃなくて、この距離で昴さんがなにかわめいている唇の動きまで見えて、聖さんの反応も同時に見える。わたしが視線を動かすと、それに合わせて適度にピントが合って、ズームもかかって、細かいところまで見たいものがよく見える感じ。あ、昴さん、パンツはパステルイエローとホワイトのボーダー。
風でスカートめくれてて、見えちゃってて。
「すごいでしょう？　魔力の込められたメガネなの。我が家に代々伝わってるもので、自分で鍵を使ってるときは目で足りるから、そんなに変わらないんだけど」
「ちょうだい」
内腿の付け根近くにホクロがある、なんて見ながらわたしは言う。これは便利。
「里美さん……」
パッと命さんにメガネを外された。
「あぁっ」
せっかくだから、聖さんの方もチェックしようと思ったのに。
「話、聞いてました？」
「う、うん。家に代々伝わってるって。家宝みたいなものなんだよ

ね」
　けど、命さんはちょっとほんとうに怒ってる風だったので、わたしは苦笑いをして。
「はい。貸すだけ。もちろん、あげられません、ね？」
「ありがとうございます」
　頭を下げて。
「はじまった！」
　だれかの声に、慌ててメガネをかけて見ると。
　昴さんが突進してて。
　間合いを詰めた、と思った直後、なにかがわたしたちの頭上を飛んでいって。
「……？」
　背後、昴さんが同じ屋根の上に転がってる。
　鋭い視線を感じて振り返ると、図書館の屋根にはさっきまでと変わらぬ落ち着いた面持ちで立つ聖さん一人がこちらを見ている。片手にはカバンを持ち、制服にも乱れなく、いたって平静。けれど、なにかをしたのは明らかで。
　クラスメイトたちみんな、声も出なかった。
「聖さん、速い……」
　命さんのつぶやきが耳に入る。
「見えた？」
　わたしの問いに、彼女は首を横に振って。
「ここまで差があるとは思わなかった。同じ八頭（はっとう）の家の同い年で」
「はっとう？」
「聖ぃっ……ナメた真似をしくさって」
　わたしの疑問は、ガバッと起き上がって叫んだ昴さんの声にかき消された。
「イワしたる！」
　握った両拳を突き出して、くっつけ、ゆっくりと広げていく。
　離れていく拳と拳の間に、目にも見える光の帯が現れて、黄色い

光は蛍光灯を握っているようでもあったけど、それはなにかに収まっているというより、炎のように生命力をたたえ、揺れる光で、むしろ太陽や月のような自然の光に近く見えた。
「……剣（つるぎ）」
それは平島さんに一度、見せてもらったことがある。
視えるほど魔力を集めて束ねて貫き裂く力、守護者が相手の命を絶つために抜く。
ひとりひとりの力を純粋な暴力に変える唯一無二の魔法。
「星河ちゃん、それは本当にだめぇっ！」
命さんの叫びは、ほとんど悲鳴で。
力を量るでも、ケンカでも、このままでは済まない。命の遣り取り。わたし以外のクラスメイトたちも、さすがに止めに入るように動いてて、でも、昴さんは自分の身の丈ほどまで伸ばした一振りの剣を両手で握りしめてて、目は聖さんを睨んでて、もう止まらない。
緊張に見開いた目が痛くて、目を閉じて。
「はがっ」
昴さんの声に開いたときには。
その正面で聖さんの長い脚の一本が青空に向かってまっすぐに伸びてて。
スカートの下は薄い紫色のレギンスで。
「は？」「え？」「なっ」「わ！」「ぎょっ」「ほ？」「うっ」「たっ」「の？」「し」「い？」
クラスメイトが口々に感嘆するほど鮮やかに。
昴さんが顎を蹴り上げられ、仰向けに倒れていた。
「終わっちゃった……」
「ええ」
命さんはなんとも言えない顔をしてた。たぶん、わたしも同じ。
近くにいたわたしたちがなにかをするより早く、聖さんは動いてて。それがこの一団と、彼女の、動かしようのない力の差で、昴さんとの決着だと、思い知らされる。

「……」
受け身も取れずに倒れた昴さんを見るでもなく、聖さんはわたしたちに振り返った。相手を倒したことに対する高揚も、こちらに対する緊張も感じさせない、冷たいふたつの目が、射抜くように、あって。わたしたちを見てて。
場の全員に寒気が走ったと思う。
戦うつもりのないわたしですらそうだったから。
「去年の夏のこと、ごめんなさい」
べつに、反省した風でもなく、けれど、反省してないという風でもない顔で、聖さんは腰を深く曲げて、つまり、それは形の上ではきちんと、謝罪した。人間味が読み取れないのは、美人過ぎるからなのか、わたしはわからなくなる。
「みなさんが、聖の人間を、いやだと思うのは当然です」
頭を上げた、聖さんは淡々と、言葉をつづけて。
「けれど、夏のことは、それでも、守護者の仕事ではあったはずです。聖の人間が口にするには、とても勝手な言い分ですが、これ以上、言えることもありません」
もう一度、丁寧に頭を下げる。
「守護者になる資格があるかないかは、自分で決めます」
そして決然と、宣言した。
教室で昴さんに浴びせられた言葉への、それが聖さんの答えで、だからこそ、こうして力で捻じ伏せたのだと、はっきりと、目に見える形で示された。それに、だれも、なにも反論しなかった。この歴然とした力の差の前に、反論なんかできるわけもなく。
認めるしかなくて。
聖さんがその場を去るのを、見送った。
「――八頭っていうのは、日本の守護者たちの血を遡って、古くからある八つの家のことで、特に大きな魔界の穴の守護を専属で行なってる。聖も、昴も、色々と伝統があって、強力な資質の守護者を

たくさん出してる。だいぶ、世の流れで緩くはなってるけど。聖勇希は本物だと思う。ずっとカバンを持ったまま戦ってたけど《変異》後の力を日常生活レベルまで一方で抑えておけるだけでも普通じゃないもの」

命さんが、気絶したまま起きない昴さんを寮まで背負うと言って。

「詳しいんだ」

わたしはその背中から昴さんがずり落ちないように抑えながら後ろを歩く。学院から出るのでもう鍵も使っていない。　ただの力仕事だから。

「詳しいってほどじゃない、そういう環境で育っただけ。実は、星河ちゃんとは、遠い親戚なの。八頭ほどじゃないけど古くて、時代が時代なら、姫と侍女みたいな関係だったかもしれない。ここに来たのも、実は彼女を見張るため、って言ったら信じる？　自分で言ってて、信じられないけど本当なのよ、ね」

「……姫がお転婆で大変だ」

「本当に、ね」

わたしたちは笑った。

昴さんを部屋のベッドに寝かせると「割った窓ガラスを片付けて、先生に事情を説明する」とクラス委員っぽいことを言って、命さんは学院に引き返す。お昼にはちょっと遅い。わたしは、お湯を沸かして、置いてあった黄色の急須にお茶をいれ、置いてあったお煎餅をパリパリしながら待つ。

「……ぱりぱりぼりぼり、あんた、それうちの煎餅や！」

割とすぐ目を覚ました。元気に。

打ち所が良かった、というか、上手かったらしい。

「いただいてます、おいしいね、これ、どこの？」

それでも痛々しい真っ赤な顎をみないようにして、わたしは答えた。

「なんや府本、笑いたければ笑ってええで？　あんだけ派手にゆうて……」

「ザマーミロ、いい気味」
「……っ」
言わせたくせに、キレ気味にわたしに背を向け、胡坐をかく。
「でも、今日のことは昴さんに感謝してるよ、わたし」
「なにがや」
「やっぱり、生の実力を見られるのは他のなにより良い経験だし、それに――」
ずずっとお茶をすすって。
漠然とみんな蹴散らせばいいと思っていたけど、聖さんを見て確信したことがある。
美人で、強くて、礼儀正しい、完璧人間みたいな。
そういうのって、ぜったい、ともかく、間違いなく、決定的に。
「――聖さんが当面の目標で、倒すべき敵だって、ハッキリしたから」
ムカつく。
心底。
「はぁ？」
「ということで、一緒に守護者目指してがんばろう？」
「……いや、あんたの動機に、うちを巻き込んでほしくないんやけど」
「そう言わずに」
簡単な道のりじゃないだろうけど、道が見えるのは悪くなくて。
また、ワクワクしてきてた。

#6　風でスカートめくれてて、見えちゃってて。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

♭3　聖木乃女子学院アニメ研究部（春）

聖木乃女子学院アニメ研究部。

昨年度、会員三名、高等部の図書室で細々と活動していた同好会は、この春、中等部から二名の新入部員を迎えることとなり、正式な部活動として認められる運びとなった――というのは表向きの話であり、昨夏の襲撃の折、興味本位で首をつっこみ、魔法について知ることとなったナツメ、ヤタテ、ミズキに対する措置であることは明らかだった。

「口止め料としては、安く買い叩かれた感があるっす……」

ナツメは地図をみながらぼやいた。

日焼けというわけでもない色黒の健康そうな雰囲気に似合わず、落ち葉に覆われた、交通の気配のない砂利道を進む歩みは鈍く、息も既に上がっている。

「……行くだけで高等部から二十分って、ちょっとしたウォーキングっすよこれ」

学院の敷地の外れも外れ、各部の校舎がある区画からも離れ、街を抜け、大学の農学部が管理する森林の仲。学生のほとんどが卒業するまで入ることもないであろう場所に、その部室はあるらしかった。部活として承認されても、通常はすんなりと部室をもらえることなどないので優遇にも見えるが、事実上、隔離に他ならない。この立地ではこれ以上の新入部員にも期待できなかった。

「まー、安くても貰えただけマシなんじゃないかしら？　どちらにしても女子高生が騒いで信じてもらえるわけのない話だから、これはこれで。空気も美味しいでしょう？」

満更お世辞でもなさそうに、ヤタテは深呼吸する。

色白で見るからに育ちの良さをうかがわせる彼女だが、抱える大きな荷物には、良家の子女が決して家には持ち帰れない類の書籍が大量に詰め込まれている。

「あった、あった、ぜっと」
尊敬する人物の口調を真似ながら、ミズキは少し嬉しそうに引き返してくる。
両手にナツメの荷物も持ちながら、二人よりずっと先行して、さらにパタパタと走って戻ってくるアホ毛のロリっ子はいつになくハイテンションだった。
「見えたっすか？」
「あと百メートルだ、ぜっと」
ミズキはそう言いながらナツメの背後に回り、その背中を押す。
そしてそれは林の向こう側から成仏できぬ亡霊のように唐突に姿を表した。
「……なんっすか、これ」
「なんでしょう？　子供が百パーセント逃げ出すおかしの家、みたいな……」
「手作り秘密基地感に胸がたかなる、ぜっと」
かつて大学部にあった愛好サークルが建てたログハウス。シンプルな完成形を目指したと推察されるそれは、しかし全体として明らかに技術と丁寧さを欠いた歪んだ建物であり、かつ意味なく細部にはやたらと趣味的で時代遅れの可愛さを押し付けがましく装飾され、見るものを困惑と混乱に導く一棟であった。
見る者を斜めにさせる屋根を見上げる三人の前で、長方形が五角形のドアが開く。
「お疲れ様です、先輩方」
中等部の制服にエプロンを着けた少女がモップ片手に現れる。
「掃除はあらかた終わってますから、どうぞ中へ」
「……あ、あーっ！」
その姿を見て、ナツメが叫んだ。
「あなたは、あの日の、タキシードの……」
「はい、如月舞（きさらぎまい）です。……って、先輩方、聞いてませんでしたか？」
ヤタテの問いかけに先回りして、頭に巻いた手ぬぐいを外しなが

ら舞は言う。
「新入生が新入部員としか聞いてなかった、ぜっと」
「おかしいとは思ってたっす。新学期早々に宣伝もしてない中等部から新入部員が入って
、前々から出していた部室申請が通るとかありえなかったっす。口止めかと思ったら、ハメられたっす。これは陰謀っすよ！」
「……そんな、陰謀だなんて誤解ですよ。落ち着いて仲良くしましょう？」
首をぶんぶん振りながら後退るナツメに、すたすたと近づいて舞はその手を両手で握りにっこりと笑いかける。今日、中学生になったばかりとは思えない落ち着きはらった仕草だった。
「どっちが年上かわからないね、ナツメちゃん」
その様子を見ながら、あきらめた風にヤタテは肩をすくめる。
「子供だ、ぜっと」
ミズキはそう言って、荷物を担ぎなおしてログハウスに向かおうとする。
「いや、いやいや、ヤタテっちも、ミズキっちも、いいんすか？この子はあれっすよ、完璧にあっち側の人間っすよ？　魔法とかなんとか得体の知れないものを隠すために国家権力と癒着してる……自分はイヤっす。あの日、見たことや聞いたことについて喋らないことは同意したんっすから、喋ったら家族も大変なことになるとか脅されもしたんっすから、学校でくらい、これまで通り、自由にアニメを楽しみたいっすよ！」
ナツメの叫びは林の静寂に響いた。
「……それは、しょうがないんじゃないかしら。魔法が実際にあるんだから」
「にゃんこも喋った、ぜっと」
それについては十分に考えた、という風に二人は俯く。
彼女らが知らされたことは守護者という存在がいて、その戦いが夏の件であるということと、聖木乃女子学院が守護者を養成する施

設であるということである。それほど深くまで知ったというわけではなかったが、知らずに通っていた学校そのものが圧力をかけてきたのだからその点では拒絶のしようもなかった。
「なんすか、このアウェーな感じ……あのウェディングドレスの男の子と一緒にいた時点でこの子が怪しいって思うのは当然じゃないっすか。そりゃ、まぁ自分だって半年、言うなりでやってきたっすけど、それはそれ、これはこれっすよ！」
自分に注がれる二人の冷めた視線にナツメは抗議し、
「す、少なくとも、如月さん？　がアニメ好きなところを見せてもらわなきゃ入部は認められないっす！　部長として、部員の資格があるかどうか見極めたいっすね！」
苦し紛れに投げかけた。
「話の流れは強引だけど、確かに如月さんの属性は気になるかな？」
「同意だ、ぜっと」
二人は同好の士を期待して舞を見る。
「……え、っと？　ポニョは可愛かった、かな」
「「「……」」」
恥ずかしそうに言った舞の答えに三人は沈黙した。
「あれ？　ポニョ知りません？　ジブリの……」
「いや、説明無用っす」
きっぱりとナツメは言った。
「聞いたっすよね、ヤタテっちミズキっち。この子は一般人っす。数年前のポニョ可愛いで今アニメ研究部に入ろうなんて人間がいてたまるかって話っす！　コクリコ坂とは言わないっすけど、そこはせめてテレビ放送済みのアリエッティの感想ぐらいは言ってくれないとダメっすよ！」
「テレビってあんまり見ないし」
ナツメの勢いに気圧されながら、舞はあっけらかんと答える。
「なら、ガンダムはどうっすか」
「お台場におっきいの立ってたロボット！　見ました見ました！」

わかる話題だと舞は何度もうなずく。
「……モビルスーツっす」
ナツメは重々しく告げた。
「はい？」
「ま、それはいいっす。百歩譲るっす。ロボットはロボットっすけど、ネットの受け売りでも、今やってるのが評判悪いぐらい言ってくれないと、アニメに対してアンテナ張ってないのまるわかりじゃないっすか！　テレビどころかネットですらアニメ見てないっすよね？　如月さん！」
「……」
意味不明な追求に舞は他の二人に助けを求める視線を送ったが、アウェーが入れ替わったことを理解する。さきほどまでナツメを冷ややかに見ていたそのままの視線が向けられている。意味不明であるということが仲間でないことの証明になるのだということぐらいは察せられた。
「……だって、舞、アニメなんかに興味ないし」
そしてぶちまけた。
「言っちゃった」「……ぜっと」
あらゆる趣味に対して『～なんか』というフレーズは禁句であることはあらためて説明するまでもないことだが、とりわけナツメはアニメを軽んじられることに過敏である。それはとりもなおさず、彼女の自信のなさの裏返しでもあったのだが。
「それは宣戦布告と受け取っていいっすか？」
わなわなと唇を震わせながら、ナツメは言う。
「どうぞご勝手に、舞はべつに……」
うんざりした様子で、空を見上げながら答えた舞の顔がパッと明るくなった。
「勇希！」
「「「！」」」
叫んだ声に三名もつられて上を見る。

階段のように木々の枝を駆け下りて、ログハウスのデッキへふわりと着地すると、聖勇希はその薄い胸から紫色に輝く鍵を引き抜き、小さく息を吐く。そしてショートヘアの乱れを直しながら舞に微笑みかけ、呆気にとられている三名の顔を見る。
「新入部員、聖勇希、中等部一年G組、よろしく！」
はきはきと自己紹介する。教室でのそれとはまるで別人のトーン。
「……なんっすか？」「どういうことなのかしら？」「理解不能だ、ぜっと」
三名は面食らった、何故ならば。
「「「男子」」」「っすよね？」「でしょう？」「だ、ぜっと」
夏、駅前で暴れた少年。そしてウェディングドレスを着て現れた少年。と同一人物であることに疑いの余地はなかった。女子の格好をすれば女子に見える美少年とかそういう問題ではなかった。女子校に男子が生徒として紛れている。」
「だから？」
勇希は当然のことのように聞き返す。
「だ、だからじゃないっすよ、そんなこんなことバレたら大変……」
「だから！　おれはこの部活に入るんで――」
ナツメの言葉に割って入り、勇希は言う。
「――男だってことはナイショに」
「「「は？」」」
三名の理解は追いつかなかった。
「べつに舞も勇希もアニメに興味があるからここに来たんじゃなくて、勇希の秘密を隠すためにここに来てるだけってことです先輩方。魔法のこととか関係なし！　ね、勇希？」
「そーそー、魔法の機密保持は守護者の仕事じゃねーから」
だが、二人はどんどんと先に話を進めていく。
三名は互いに顔を見合わせ、だれも話についていけてないことを瞬時に察知しあう。魔法がどうとかではない、もっと恐ろしいものの片鱗。それが目の前に現れたと言うことだけは理解を共有できた

のだ。その名は、ジェネレーションギャップ。
「女子校に通う男子というシチュエーションがまるで捨てネタの扱いっすけど」
「それより女装がまるで普通なんだけどどうなのかしら」
「女装男子と普通に恋愛してる女子も異次元だ、ぜっと」
ついていけない。
言葉にできない結論はすぐに出た。
「ひとつだけ質問、いいっすか？」
ナツメは三名を代表する形で言う。
「いいよ？」
「アニメは好き？」
「うん。けっこー好き。おれ、親が家にいなかったから、小さい頃からよく見てた。何度も見てるし、3は映画館にも行ったよ、トイ・ストーリー」
シンプルな答えが返ってくる。
「「「ピクサー！」」」
ついていけない諸々の中で、ひとつだけはっきりしたことがあった。
ナツメ、ヤタテ、ミズキ、三名の平穏は危機に瀕している。

♭3　聖木乃女子学院アニメ研究部（春）（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

#7　レポ？

夜までには身体をほぐしておきたくて。

「昴さん、これからヒマ？」

まだあまり慣れてない街でひとりトレーニングするのはさびしい気がして、誘ってはみたんだけど「ヒマやない」と一刀両断された。態度には出さないようにしてたけど、聖さんに文字通り一蹴されて落ち込んでるのは見え見え。そんな時こそ身体を動かすとスッキリするのに、ってわたしが言うよりはやく、昴さんはお煎餅を一枚くわえて部屋を出て行ってしまう。

「ざんねん」

ついでに鍵を貰ったときのこと、聞いておきたかった。

そのことについて平島さんは「守護者候補生にとっての入学式本番は鍵の授受」って言ってて、内容は「魔力を身体に取り込むことで際限なく解放される欲望を抑え込むために担当の守護者が候補生に物理的洗礼を与える」ってそのものを言葉にはしなかったけど、明らかにスパルタ極まるものっぽくて歯医者に行く前みたいな気持ちになったことを思い出す。

なんていうか、古いっていうか、科学的じゃない感じ。

経験をバカにはしないけど、魔力で気持ちが大きくなるのを叩き潰して矯正するって、頭を使ってなくない？

スポーツみたいにオープンに技術を競ってるわけじゃないから、八頭とかいうイイトコの子ならそういう嫌な面を避ける方法とか知ってるかなって、ちょっと思ったんだけど、そこまで仲良くもなれなかったから仕方ない。鍵がなきゃ力も手に入らないし、一時のことだと耐えるしかないっぽい。

トレーニングウェアに着替えて寮を出る。

人の気配がない候補生寮とちがって、外では寮棟のそこかしこから、笑いあう声が聞こえてる。連れ立ってどこかへ出かける楽しそ

うな人たち、ふつうの生徒たち。ほとんどが推薦入学ということになってる守護者候補生たちは入学前に部活を決めているからここにいない。わたしも体操部にはいかなきゃいけないって言われてる、けど。

距離をおきたいのが、本音。

平島さんとのトレーニングでハッキリしてたことだけど、わたしの小さくて軽い身体は戦いには向かない。もちろん格闘技なんてやったことなかったからぜんぜんモノになってないのはそうなんだけど、技術と経験は鍵が補ってくれるってことだから、体格の差が戦いを決めるところがあるっぽいのは感じていて。

魔力の効果が肉体を《変異》させるものだから、肉体の総量が使える魔力の総量とイコールになる。そんな説明をされて、それってつまり、単純に言っちゃうと「大きい人の方が強い」ってこと？って平島さんに疑問をぶつけたら「《変異》は意志を伝えやすい部位により強く影響を与えるから、必ずしもそうじゃない」「脂肪と筋肉なら筋肉により強く、その中でもより使い込んだ方に」とかって、わかるようなわからないようなことを言ってはぐらかしてたけど。べつの場面で、平島さん自身、守護者の中では弱い方だって認めてたし。

体操の身の軽さ『だけ』では上にはいけないってことは、たしかだから。

教えてもらった立場で言うべきことじゃないのかもしれないけど、大成しなかった体操選手を両親に持つ才能のない娘として、指導者はこっちから選ぶべきって気がしてる。結果どうなるにしても、少なくとも後悔しないためには。

選ぶなら素直に尊敬できるすごい人に教わりたいってシンプルに思う。ついでに政治力もあっていいポジションへねじ込める人だともっといい、けど。それはぜーたくかな。

とかなんとか。

慣れてもいない街で、考えごとをしながらランニングなんかして

たら、荒れたアスファルトにつまづいて。当然、とっさに身体が反応してくるっとバランスをとって着地したんだけど。
べちゃって。
別のなにかをふんずけた。やな感触に右足の裏から寒気が走って。
おそるおそる下を見る。靴の下には黄土色のぬめっとした光沢が見えて。これはもうマナーの悪い犬の散歩のおとしものだと思って、周囲を見回してだれにも見られてないことを確認して、そのものを見ないようにしながら、地面に歩道と車道の間にあるちょっとしたでっぱりにこすりつけると。
「んレポぅっ！」
レポ？
黄土色のものが鳴いた、ような。
見ると、靴に巻きついていて。
「――っ！」
わたしも悲鳴を上げそうになって。
そいつと目が合った。
巻きついているように見えたそれはヒトデみたいな形の手だか足だかで、その中心が人間みたいな充血した一つ目を血走らせ、片足立ちのわたしの足を這い上がってくる。
「いい、匂いレポ……」
息遣いはくっついている内側、たぶん目の裏側に口がついているのだろうけど、そんなことはどうでもよくて、いいにおいって、得体のしれない生き物がいいにおいって。妙に男らしい野太い声で。
「へんたい……っ」
考えてる余裕なかった。
足首から、トレーニングウェアの中に入ろうとしてるそれの一個しかない目を、人差し指と中指をそろえて突き立てた。変質者に出会ったら目を狙えって、学校で習ったから。助けを呼ぶのが先かもしれないけど、相手は人間じゃないし。
ぶにゅって。

「危ないレポ」
そいつは今度はわたしの手の方に裏返るようにしてへばりついて、予想通りというか、口みたいな器官がむき出しで、なんか歯みたいなのと舌みたいなのと、中がやけに発色のいいピンク色で、ねばって、ねばねばってしてて。
「心配するなレポ。貴様に危害を加えたりはしないレポ」
なんかしゃべった。レポレポレポレポ。
「――――！」
悲鳴が声にならない。もう泣きたい。
きれいとかきたないとか気してられない。もう一方の手ではがそうとしたけど、そいつ今度はそっちに移動してくる。どうしたらいいかわからなくて、助けを求めようとしたけど、正面から、おばあさんが歩いてきてて。
わたしは助けられる側じゃないって、思い出した。
守護者になることに使命感とか、べつにないけど。なこんなわけのわからないものをお年寄りに押しつけるのはわたしの気分がよくない。ともかく人目につかないところでなんとかしなきゃと、なにごともないフリでその横を走りぬける。
「我輩の名はレーポン・ポプ・レポレートレポ。貴様の名はなんというレポ」
「レポポレポレポ？」
手に巻きつくそれはわたしの気持ちなんて関係なく喋る。おばあさんがハッとこっちを振り返るのがわかって、わたしはダッシュ。
っていうか、なんでこいつちょっと偉そうに喋るんだろ。
「違うレポ！　レーポン・ポプ・レポレートレポ！　偉大なるポプ族レポレート家の次代を担う男レポ！　貴様の名は！　我輩に名を聞かれる栄誉を与えてやるといっているのだレポ！　さっさと名乗れレポ！」
「栄誉……？　はっ」
よくわからないけど、いいご身分のようでムカつく。

小さな公園を見つけて、わたしはその隅のトイレに駆け込む。幸い、他の利用者はいない。そのまま手を洗う要領で手にくっついてる生物に蛇口の水を浴びせる。
「ごば、なにをするレポ！　がば、我輩は名前を聞いただけレポ！」
苦しそうに叫ぶ声が響く。
「わたしの手から離れるなら名前ぐらいは教えてあげる！」
「げは、無理レポ！　魔力がうすい、げふぉ、この地上で貴様から離れたら、ばはっ、我輩が死ぬレポぶほはっ！」
「水攻めでも死ぬんじゃないの！」
「ぽはっ、待て、待つのだレポ！　これで死ぬと、がひょっ、貴様が。、望むようにはっ、ぶふ、離れられんレポ　！　それでもいいのかレポ！」
「……」
ウソを言ってるかもしれなかったけど、ほんとうに離れなかったら困るのでとりあえず洗面台の外に出してみる。ヒトデ的生物はわたしの手にくっついたまま、むき出しの口で荒い呼吸を吐いてて、すっごい気持ち悪い。
でも、今、魔力って言った？
「レーポン、だっけ、この世界の生き物じゃないの？」
そう思えば少しは納得できる気はして。
「貴様、我輩を呼ぶときはせめてレーポン様と呼ばんかレポ！」
「……はい、水攻め」
尊大な態度が気に食わないのでわたしはまた洗面台に押し込む。
「おば、待つレポ。許す、げがっ、呼び捨てを、ばっ、許すレポ！」
「よし」
生殺与奪をどっちが握っているかわかったか。
「はぁ、はぁ……地上の人間が野蛮だとは聞いていたレポが、ここまでとは思わなかったレポ……貴様の言うとおり、我輩はこの世界の生き物ではないレポ。魔界からやってきたレポ。これでいいレポ」
「魔界から……」

わたしはつぶやき、手にへばりついたレーポンをつねる。
「痛いレポっ！　いきなり、なにするレポ！」
「夢かと思って」
「それは自分をつねらないと意味のない確認方法レポ！」
「……おぉ」
意外とあなどれない。
この生き物、異界のベタなボケを処理できる。

#7　レポ？（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9305y/

候補生たち

2012年1月8日21時51分発行